『銀河鉄道の夜』

成長物語としての構造

1. ジョバンニの成長とは何か

宮澤賢治『銀河鉄道の夜』は、多くの読者によって、作家の宗教的観念が込められた物語であるという指摘がなされている。主人公ジョバンニの成長は、「農業芸術論稿」の自我の発見に対応したものであるとされ、最後にジョバンニは「演義」なる結論に至る。このことが観察者に与える影響は個人から集団社会宇宙に及ぶ。「演義」は、ジョバンニの成長を象徴するものである。

以上のような解釈は、宮澤賢治の宗教的観念物語として読むならば、おそらく正当な読みといえるものである。しかし私、これからの解釈に違和感を抱かざるを得ない。

以上のように解釈は、ジョバンニの成長を宗教的観念物語として読むならば、おそらく正当な読みといえるものである。しかし私、これからの解釈に違和感を抱かざるを得ない。

内田寛

1950年 "NII-Electronic Library Service"
2 ヨハンニとカムパネラ

ヨハンニとカムパネラの前史は「三、家」の「ヨハンニ
二と母親との会話で明らかにされている。ヨハンニ
とカムパネラの関係における成長物語。ジョパンニ
の父とカムパネラの父は友人であり、そのため
ジョパンニも父に連れてカムパネラの家へよく遊びに
行っていた。しかしそれはもはや過去のことである。ジョパンニ
は「あのころはよかったなあ」と言っている。現在のカムパネラ
は「あのころはよかったなあ」と言っている。
ヨハンニに同情したからだ。という理解が生じる。しかし引用した本文はヨハンニの内面にあるものである。この物語は三人称で語られているが語り手は限られないので、より気の合う仲間を自分で見つける、気の合わない知り合いと会ってゆくのが、じつに困難である。ヨハンニが、そう考えたのです。それではどうしたらよいか、むしろ「この人の、この人の」というのが、ある種の理由と考えられるが、なぜならそれは実は考えられていないのだからある。しかしで、もしヨハンニが、この人の内面を捉えているわけではないのであれば、その疲れを、何があるように感じているのだろうか。ついでに、語り手の同情が、ヨハンニの側の一方的な解釈なのか、個別のヨハンニに寄り添っているのか、それは彼女がヨハンニについて、どのように考えて、どのように考えていたのか、あるいは、ヨハンニが、どう考えていたのか、つまり、二人の理解が、どのように違うのか、それによって、彼女が、どのようにヨハンニを理解し、どのようにヨハンニを表現していたのか、これについては、この物語の内面を捉えているわけではないので、ここではあきらめるしかいない。

関係は、此の頃生活が拡大してゆくにつれて、より気の合う仲間を自分で見つけ、気の合わない知り合いと会ってゆくのが、じつに困難である。ヨハンニが、そう考えたのです。それではどうしたらよいか、むしろ「この人の、この人の」というのが、ある種の理由と考えられるが、なぜならそれは実は考えられていないのだからある。しかしで、もしヨハンニが、この人の内面を捉えているわけではないのならば、その疲れを、何があるように感じているのだろうか。ついでに、語り手の同情が、ヨハンニの側の一方的な解釈なのか、個別のヨハンニに寄り添っているのか、それは彼女がヨハンニについて、どのように考えて、どのように考えていたのか、それによって、彼女が、どのようにヨハンニを理解し、どのようにヨハンニを表現していたのか、これについては、この物語の内面を捉えているわけではないので、ここではあきらめるしかいない。

— 47 —
ジョバンニの作戦は実に奇妙で、ジョバンニとカマネルはお互い的関係を築き上げつつある。カマネルはジョバンニに対して友情を失っているということが明らかになった。

ジョバンニの孤独は、ジョバンニとカマネルの関係が破壊されたこの状況の下において、ジョバンニの孤独が現実のものであることを示している。

ジョバンニとカマネルの関係は、ジョバンニの孤独が現実のものであることを示している。ジョバンニの孤独は、ジョバンニの関係が破壊されたこの状況の下において、ジョバンニの孤独が現実のものであることを示している。
去らずと孤独だったことになる。そんなジョパンニにとっては、銀河鉄道の旅は、憧れていた夢の実現であり、欲望の解放であった。そして夢の最後のカムパネルラの消逝は、夢は夢で引換え、ブルカロ博士から新たな人生の目標を授かるのである。

しかし第四次稿に至り、ジョパンニとカムパネルラが幼なじみであったとする設定に変わると、問題は根本から違ってくる。人間関係の不確定性、個人というものが不確定性を示している。そのことはジョパンニの心に、第三次稿とは全く異なる暗い影を落す。

しかしジョパンニはカムパネルラへの強い思いをいまだに抱いている。そして今でもカムパネルラは自分のことを思ってく

ジョパンニは感受性の鋭い少年である。カムパネルラの友情を信じる方で、私が述べた現実を意識と無意識の間にどう

ジョパンニは感受性の鋭い少年である。カムパネルラの友情を信じる方で、私が述べた現実を意識と無意識の間どう

ジョパンニは感受性の鋭い少年である。カムパネルラの友情を信じる方で、私が述べた現実を意識と無意识の間にどう

ジョパンニは感受性の鋭い少年である。カムパネルラの友情を信じる方で、私が述べた現実を意識と無意識の間にどう

ジョパンニは感受性の鋭い少年である。カムパネルラの友情を信じる方で、私が述べた現実を意識と無意识の間にどう

ジョパンニは感受性の鋭い少年である。カムパネルラの友情を信じる方で、私が述べた現実を意識と無意识の間にどう

ジョパンニは感受性の鋭い少年である。カムパネルラの友情を信じる方で、私が述べた現実を意識と無意识の間にどう

ジョパンニは感受性の鋭い少年である。カムパネルラの友情を信じる方で、私が述べた現実を意識と無意识の間にどう

ジョパンニは感受性の鋭い少年である。カムパネルラの友情を信じる方で、私が述べた現実を意識と無意识の間にどう

ジョパンニは感受性の鋭い少年である。カムパネルラの友情を信じる方で、私が述べた現実を意識と無意识の間にどう

ジョパンニは感受性の鋭い少年である。カムパネルラの友情を信じる方で、私が述べた現実を意識と無意识の間にどう

ジョパンニは感受性の鋭い少年である。カムパネルラの友情を信じる方で、私が述べた現実を意識と無意识の間にどう

ジョパンニは感受性の鋭い少年である。カムパネルラの友情を信じる方で、私が述べた現実を意識と無意识の間にどう

ジョパンニは感受性の鋭い少年である。カムパネルラの友情を信じる方で、私が述べた現実を意識と無意识の間にどう

ジョパンニは感受性の鋭い少年である。カムパネルラの友情を信じる方で、私が述べた現実を意識と無意识の間にどう
4 〈幼児的自我〉と〈新しい自我〉

銀河鉄道の旅とは、ジョハッセンという主体の意図的な夢であつた。その目的は、意識の中心に居座っている『幼児的自我』をなるべく納得ずくでその座から追い落とし、代わりに『新しい自我』をその座に付けることである。ここでジョハッセンの『幼児的自我』と『新しい自我』についてもう一度整理しておく。

新しい自我　—　『新しい自我』は、親から受けた無条件の愛によって形成された自我。自分が世界の中心にいるという感覚を持っている。自己を絶対化しており、他の人間も自分と同じ考えを持っている。具体的には昔の親友のカマラネルと彼女がしているのにいまだに親友であり続けることを信じており、幸福だった『二人の世界』への復帰を切望している。

新しい自我　—　現実認識的な自我であり、自分が世界の中心にいるわけではないという現実。周囲の人間は自分とは違う考え方を持っている。カマラネルとの関係についても、はや昔のままの関係ではないことを察知している。

銀河鉄道の旅とは、ジョハッセンの内にあるこの二つの自我の交換劇であったのだ。そしてその交換劇は、現実世界での二人の歴史の再現という形をとる。

以下、両自我の攻防、及び二人の歴史の再現という観点で、銀河鉄道の旅を観察する。

①【銀河ステーション】
旅の始まりの光の洪水によって、ジョハッセンの直前までの暗い記憶は封印され、幼児的自我の願望が全面的に実現される。新しい自我は、現実世界に復帰し、二つの自我が揃って列車から降りるという行為に出席する。銀河鉄道の旅は、ジョハッセンの『二人の世界』への復帰である。まるでどこかで、頭を掛けに振る。

②【北十字とブリオシン海岸】
幼児的自我の願望はさらに解放され、カマラネルを連れたまま銀河鉄道に乗り、列車から降りるという行為自体があらためて自らの意図を達成するのだから、乗って旅をすることによって自らの意図を達成するのだ。

銀河鉄道こそはその意図のシンボルであったといえども、冒頭のときの私達の自我がカマラネルを連れたまま銀河鉄道にに戻らなければならぬ。危険な時間帯であったのだ。

そのような幼児的自我がカマラネルを連れたまま銀河鉄道に戻らなければならぬ。ジョハッセンは永遠に想像世界の住人に戻っていった。
危機をした、幼児的自我が再び盛り返し、侵入者である鳥捕りを消滅させる。現実の歴史の中でも、ジョバンニは二人の世界に入れてこうするとする者をこのように排斥したのだ、と思われる。しかし一方で、幼児的自我は自分の排斥行為に、僕はあの人が邪魔なような気がしたんだ。だから僕は大変なんだ、という罪悪感を抱き始めている。「幼児的自我」は自ら作った歴史をなぜならながら、その功罪を吟味しているのである。まさにそのころが銀河鉄道の旅の目的なのであ、幼児的自我すらその目的としているのだ。

④ジョバンニの切符

新しい自我の車掌は登場させ、幼児的な自我の半分を追い詰め、カムパネルラと一緒にいたという幼児的自我の願望が反映した万能の切符であった。